

狒ブーはどうしてネオ・トラなのか
H6.10.1/全日本社会教育連合会
社会教育49巻10号

狒ブーはどうして
ネオ・トラなのか

ネオ（新しい）でトラ（伝統的）
な狒ブー

先日、「二世紀の青年事業を探る」という研究会が開かれた。それは、東京都青年の家の主催で、都内の青年事業担当者が集まって一泊二日で話し合いなどを行うというものであった。わが「狒江ヤングブートル教室」も、「ネオ・トラ部門」として事例発表を行った。青年事業担当者のあいだでも、狒ブーが注目されているのである。

事例発表を任されたばくは、最初、恥ずかしながらネオ・トラという意味がわからなかった。研究会の担当の人に聞いてみると、新しいトラディショナル（伝統的）という意味だそうである。ばくはそれを聞いて、最初は「フーン」ぐらいにしか思っていなかったが、事例発表の準備を進めるにつれて、「そうか、狒ブーは、ネオ・トラなんだ」と、妙に納得してしまった。ここでは、そのことについて説明してみたい。

ちなみに、当日の研究会には何人かの狒ブーメンバが参加してくれて、「ネオ・トラ部門」として与えられた発表時間のおかげで、青年事業担当者の前で飛び入りで直接話しをしてくれた。それが、また、過去に体験したマルチ商法のなかの切ない仲間関係と、いま体験している狒ブーの仲間関係との鮮やかな対照なので、彼ら自身の言葉で語られたものだから、

ら、聴く人たちの関心を引き、研究会はますます盛り上がりつつあった。

アイデアばらばらなこった煮
の年間計画

とりあえずは、この二年間の月別計画を見てみよう。

一九九二年度（初年度）

七月 おもしろいやつらがそろったぞ

八月 自然キャンプの計画・準備

九月 テニスへたのびよう大会

一〇月 われら絶頂軍団

十一月 在日外国人と鎌倉ツアーなど

十二月 ジャージで踊るジャズダンス教室（ろんなノリノリXマスバ

ティール）

一月 新年会+温泉と自然を楽しむ会

二月 そと教えます主品のタネ

三月 毎週連続お別れパーティー

一九九三年度（次年度）

六月 おもしろいやつらがそろったぞ

七月 青春の食卓（講師のいない料理教室）

八月 キャンプだはい！（自然キャンプの計画・準備）

九月 チャレンジ！ゲートボール（毎週土曜日夜後）

一〇月 大連市入会式開催

十一月 市民祭りの参加と派遣A・B・

十二月 みんなノリノリXマスパーティー（食踊り・ディスコ等）

一月 新年会+温泉と自然を楽しむ会

二月 伝承遊び

パフォーマンスタレント大会

(「公民館のついで」で発表)

三月 毎週連続お別れパーティー

このアイデアばらばらのこった煮がいはなんというだろうか。しかし、これがまずトディッシュナルだとばかりには思えるのである。そもそも、社会教育の世界には、なんでもかんでも諦めよう、どうもかたがたのよきがあつたのではなかり。もちろん、ばくは、演劇なり、英会話なり、を、固定メンバーで、年間を通した系統的なカリキュラム(少なくとも依頼された講師の頭のなかには、それが存在すると思われ)によって深めたり高めたりして、今日の社会教育、青年教育の傾向を否定しようとするものではないが、戦後、住民が公民館に集まってきたのもかんでやっています。ていた頃、いわば「B級グルメの面影」も捨てたものではないと思うのだ。

いかにもトラ(伝統)的な抱プー

もうひとつの社会教育の大きな伝統的特徴として、メンバーのあいだの相互関係や相互作用を重視し、尊重するということがあげられる。この伝統は、いまでも、全国のどの社会教育現場においても大切にされていると思う。抱プーでも同様に、メンバー間の仲間関係が大切にされ、育まれてきた。その証拠に、おびたらしい数の「番外編抱プー」が日毎夜毎に勝手に行われている。

ただ、抱プーでは、そういう仲間関係を、「自分らしさを見つけた」、発揮したい、「という現代青年の願望と表裏一体のかたちで展開している。だれだって、自分にもっとも関係が深い人は自分であ

り、だから、自分をもっとも関心をもっているのは、自分や自分の生き方なのではないかと思うのだ。

しかし、そういう個人が自分に対して、自分らしさを見つめるためには、「癒しの場」として「安心して聞きたい心を開いて交流できるサンマ(時間・空間・仲間)」が必要になる。抱プーのメンバーは、これをみずから創り出してきたのである。ばくは、彼らの行動を人間の意識的、主体的な営みとして評価している。なぜなら、サンマを求めてコミュニケーションしようとしても、もしかたそれによってかえって自分が傷つけられたり相手も傷つけたりしてしまうかもしれない。そういう内なる恐怖と闘いながら、裏切られるかもしれないというリスクを背負いながら、あえて行われてきた行為だからである。また、たとえば、サンマ創出のためには、「一人でだらしなくして、いまの自分を認めてあげることによって、仲間関係から自分を守ることが大切なときもある。自分の思いどおりになつてくれない相手の存在を認める確さをも要請される。だから、おたがいを認めあなければならぬ」といふ、あるいは、人間として当然のこととはいふ、あるいは、社会教育としてはあたりまえのトラ(伝統)とはいふ、それを実際に行動に移し、サンマを創り出してきた抱プーのメンバーは、なかなかないものだと思ふのだ。

たとえば紙芝居をやったとき、もちろん、上手な人とそうでない人とがいて、

でも、うまい具合に、どんな人でも一人ひとりの持ち味がなぜかしみじみと伝わってくるのである。そのとき、中央公民館の一室には、それぞれの人々が、おたがいの持ち味を認めあう受容的な雰囲気があふれていた。仲間は大切である。しかし、仲間を大切にすることとは、自分が仲間と同一化することではない。むしろ、みずからの「自分らしさ」と相手の「自分らしさ」の違いを喜んで味わうことなのだといえよう。

抱プーのネオ(新しさ)は、どこにある?

それにしても、社会教育の関係者からいろいろなかところで「ところで、抱プーのどこが斬新なんですか」とあつたため聞かれると、ばくもわからなくなる。べつに抱プーのどこが特別ということはないではないか、どこの公民館でもこんなことはやっているのでないかという気もする。

しかし、その質問にあえて答えるとする、それは「恐れを知らないいい加減さ」とではないかと思う。普通の青年教育であれば、「健全青少年育成」ということ、人間の持っている善なるもの、部分をなるべく切り捨てて「善なるもの」をめざしたり、あるいは「善でない自己」への反省を促すことが多いのかもしれない。ところが、事実上、人間には善があるのだ。また、心モノにも善がある。たとえば、教育紙芝居でない過去の本当の紙芝居にはかなりの善がある。抱プーは、面白そうならなんでもやってみるとい

う「恐れを知らないいい加減さ」をもっている。大人のほうで業になる部分だけ精選して提供するなどというおせっかいなことはしない。その善を受け入れるか、悪を受け入れるかは、各自が決めればよいことなのだ。

また、それと関連して、「ブーの自由の精神」があげられるかもしれない。抱プーのブーは、ブーのブーである。ブーのブーは、現代社会のヒエラルキー(階層制度)によって自分の個性や自分らしさが奪われることに抵抗している姿であることが考えられる。ブーのブーではない私たちに、学校や職業を放棄してしまふことなどできないけれど、みずからの内面まで、そのヒエラルキーに従順するのはいやなのである。それに気づいてしまった「いい子ちゃん」が、今までのいい子の自分を捨てて、いい子でいるのをやめてひかれたレールから降りる場が抱プーなのだといえよう。

「いい子ちゃん」は、目上の人や権威あるものの支配を自己の内面にまで受け入れ、自由を売り払うという見返りに、じつは、それによって自分の存在を認められた、愛された、手厚く保護されているのが当然だという依存的な期待を秘めていることが多いのではないか。そういう期待は、当然、現実の他者や社会から裏切られることになる。赤ん坊のときのなんでもしてもらえ「菜園」から、能動的に働きかけないとうにもならない「社会」へと放り出されるのである。このように菜園から放逐された青年は、どうして他者や社会の秩序に対して不安をもったり、被害者意識をもったりして

生きていくことになってしまわうだろう。そういうとき、「自分はゴタクを並べていだけなんだ」と気づき、「いい子」でいようとする自分と決別して、社会のなかで自分で自分の人生を決めて生きていく自由を行使できる力を取り戻すことが必要になる。そのために、おとなが「善なるもの」だけを与えては、おとなが「いい子」にしようとしていたのでは援助にならない。ホンモノの毒のある人間と社会のなかで自分の判断で飛び回る自由を与えなければならぬ。そういう場のひとつが抱ブリーなのである。

これからのネットワーク社会を担う人間の育ち方

抱ブリーの自由とは、たとえば参入と撤退の自由である。抱ブリーでは、毎月、毎回、新規募集を繰り返しているし、「一年に一回来るだけの人もメンバーだ」ということで撤退の自由も保障している。また、何かやりたいことがあるのなら言い出しつべにゃないの。その言い出しつべがそれをやればいいのだ。しかも、言い出しつべをやる人はそこそこ変わる。これを称して「流動的リーダーシップ」と呼ぶことができる。それもネットワークの特徴のひとつだ。

市民の感覚のなかには、行政の行う事業に参加してやっているとだから楽しませる、自分の言うことを聞け、協力してあげてのだから特別扱いじゃ、見返りをよこせという行政依存的な側面もあると思う。市民のそういう腐敗構造を突き崩して、人間が主体的に水平に対面する

ネットワーク型社会を創出するために抱ブリーも一役買っているといえよう。

つきに、その「抱ブリーの自由」を実現するために年間講師としてのぼくはどんな役割を果たしているのかということが問題になる。さきほど述べたように新規参入がたびたび起こるの、抱ブリーには、「あらためて自己紹介」という機会が多い。ぼくはそのたびに、「年間講師のヨロコビちゃんです。どかが講師なんだかわかりませんが」とやや卑屈になつて自己紹介しては、また、そのたびにメンバーたちから「そうだ、そうだ」といわんばかりに笑われる。実際、ぼくは料理教室でも不器用だし、紙芝居の練習も一善下手なほうだ。でも、それだけではちょっとくやしいので、ここぞ年間講師としてのぼくの役割について述べてみたい。

その役割とは、抱ブリーのなかに社会のヒエラルキーのサブシステムとしてのミニ・ヒエラルキーが形成されることを阻止することなのではないかと、とくに、人間はだれでもちゃんと慣れにくる、先輩づら、指導者づら、先生づらを先になるものだと思ふ。抱ブリーの集団風土のなかにそういう傾向が表れたとき、それをどう排除するかということが重要である。

そのために、ぼくは、具体的にはつぎのようなことを心がけている。

ニューカマー（新規参加者）をさっそうく主役にする。

もうすでに歩いている人よりも、これから足をおおずと踏み出そうとしている人の「初めの一歩」を支援し、評価し、

気を楽にさせる。

撤退を望む人には、さわやかに深く撤退できるように仕向ける。
実際にこれらの役割をぼくがうまく果たしているかどうかは、もちろん、わからない。

抱ブリーはノリのよい抱江だけでしかできないものか？

他市区の青年事業担当者から「抱ブリーのような青年事業は、ノリがよいという抱江の地域性があるからこそできたもので、一般的にはいまの青年にそんなノリは望めないし、そもそも集まってくれないではないか」と言われることがある。これだけは反論しておきたい。

抱ブリーも、一年目は、常識的なものさしからいえば悲惨な状況もあった。今でも思いつくのだが、紙芝居のとき、四人ということがあった。紙芝居の先生と、担当職員と、ぼくと、そして青年の四人である。ほかのメンバーの残業などの事情が重なってしまったのだらう。でも、四人でけっこう楽しそうにサマを味わいながら紙芝居を練習したのを覚えている。だから、ほんとうは悲惨でもなんでもなかったのである（担当職員は胃が痛くなったと思うが）。評論家は「いまどきの青年はこういう事業に参加する積極性を失っている」といってあきらめてしまっているが、意義深いサマを実際につくりだしていくことが私たちが青年事業担当者に求められている。そうしていれば、そのサマの匂いを嗅ぎつけて、青年たちは自分の意志で集まってくる。

る。ちなみに、行政当局は、参加者数のことで頭や胃を痛める置下職員をむしろ支援しなけりやならない。
抱ブリーのひとりが、飲み会のとき、新規参加した初日の様子を話してくれた。公民館の玄関先まできたのだけれど、やっぱりいったん引き返して、また公民館に戻ってきて抱ブリーに参加したというのである。この人を、はたして「積極性が足りない」と批評してよいのだろうか。

青年に限らず、私たちが現代人一般は、サマをさがす求めながらも、そのプロセスのなかで傷ついたりおびえたりして生きている。そういう心の傷を引きずっていない「健全青年」ばかりの町なんて、そもそも存在しないのではないだろうか。抱ブリーにおおずと集まってくる青年たちこそが一般的なのだといえよう。

現代社会教育は、生涯にわたる発達の間であるとともに、「癒しのサマ」でもなければならぬと考えられる。青年教育が「出会いの場」であることは従来からいわれてきたことだが、ぼくは、これからの青年教育は「いい男といい女が出会う場」でなければならぬと思う。ここで、いい男とかいい女とかいうのは、家族や学校や職場や社会のコミュニケーションのなかで痛みや悲しみを当然だれにも受けてとめてきた彼と彼女という意味である。そういういい男やいい女は、抱江市内にだけはいず。ほかの市町村にも存在しているはずだ。
西村美奈子・昭和音楽大学短期大学助教授
抱ブリー年間講師
VOICE 03（3992）5105